

『ファウスト第Ⅱ部』の「暗い廊下」の場について —形態論への序説—

野 原 章 雄

Über die Szene „Finstere Galerie“ in Faust II

Akio Nohara

ゲーテの『ファウスト』の全体を概観する時に、第Ⅰ部ではグレートヘンが基軸となり、第Ⅱ部においてはヘレナにまつわる悲劇の推移展開が中心となっている。その構成原理から見ると、第Ⅰ部と第Ⅱ部の相違は時間と空間であり、第Ⅰ部ではファウストが時間の経過の中で体験したことが、並列されており、第Ⅱ部では広大な地霊空間のなかのさまざまな空間が同一時間上に並存しているのである。^(注1)さらに内容的には第Ⅰ部では日常的、現実的な人間の営為が中心となり、第Ⅱ部では超現実的、不可解なものの登場で大いに人びとの恒常性を揺さぶるのである。形態の国に住む母たち、人造人間ホムンクルスの出現、不気味な妖怪、妖魔たちの乱舞、扱はエンテレヒーの作用になるファウストの不死なるものの天界での浮遊と枚挙にいとまがない。

「暗い廊下」の場ではヘレナをめぐるファウストがメフィストフェレ

スを教唆煽動したり、その反対にメフィスト・フェレスがファウストの提案する難題を諫めたり、たしなめたりする情景によく出会う。こうした写実的事象の曲折を踏まえながら、詩人としてのゲーテというよりも自然科学者としてのゲーテ像をここに追ってみる。いわゆるこの「母たちの場面」には原植物、原動物、原岩石等の形態学上の生成展開を予見させ、投影するものが秘められているのである。ここで言うゲーテの造語になる形態学とはどんな学問なのであろうか。

この形態学とは形態の学（Gestaltlehre）というよりも、形成の学（Gestaltungslehre）であるといった方が、ゲーテの真意により近いと言えよう。（注2）

さらにゲーテの創始した形態学の説明がある。形態学—形態の部分と全体の考察。他のことは何も考慮することなく、形態の一致と差異を考察するもの。その補足説明としてこうある。「形態の部分」とは、植物における基本的な器官というべき原葉（Urblatt）や動物における基本的な器官というべき原椎骨（Urwirbel）と、これらの変化した諸形態を指している。（注3）このような定義をふまえながら「母たちの場面」を考察する。

（1）

第Ⅱ部第1幕の『皇帝の宮城』の中に「暗い廊下」という場面に母たちが登場する。母たちに象徴性を持たせるためには悪魔のメフィスト・フェレス（以下メフィストと記す。）の素性を明らかにする必要がある。

メフィストは空間的時間的に制約されている北欧の妖怪であり、キリスト教の世界の罪深いものの代表的存在である。Vater aller Hindernisse. (V. 6205)（あらゆる妨げの親元）であり、万物が滅亡することを常に願望している陰気な霊であるために万物の永遠の形態の根源にある「母たち」につ

いて語るとは気が重く消極的にならざるをえない。この万物の滅亡の霊であることは1339行に次のようにある。

「私は常に否定する霊です。それも当然です。というのは生じるものはすべて滅亡する価値があるものなので。それなら何にも生じてこない方がもっといいわけです。」

一方、母たちはこの世にあるものの永遠の守護者ともいえる存在であったからメフィストにとっては母たちはなじみのない異教に属するものでした。

「私はあの異教の民と関係ありません、あれは独自の地獄に住んでいる。」

(6209行)

このようにメフィストは言う。地獄は本来悪魔の領域のはずであるのに、母たちの住みかであると言って自分を善人ぶらせることの滑稽さが出ている場である。「母たち」はファウストのように死ぬべき運命にある人には知られずに、メフィストのような悪魔にとっては、その名も呼びたくないほどきられる Ambivalenz な面を持つのである。

(2)

ゲーテはこの母たちの由来についてエッカーマンに意味深長そうに概要を話している。

母たち！母たち！——何んて風変わりな響きだろう！

「これ以上、君に明かすわけにはいかない」

「ただ、私がプルタルコスの中に、ギリシアの古代では、母たちが神として語られていたことを発見したとだけは言っておこう。伝承の力を借りたのはこれだけで、あとは私自身の創意である。」

(1830年1月10日日曜日)

プルタルコス (Plutarchos, 46頃～119以後) の『英雄伝』の中の第20章

に出てくる『マルツェルス伝』に母たちについての詳述が見られる。Engyium(エンギウム)は大きくはないが、シチリア島では非常に古い町で、母たちと呼ばれた女神たちが現われたことでその名を知られている。名望のある市民のニーキアスは自分がまるで母たちに憑かれたかのように狂った様子をしたので、カルタゴ人に引きわたされることから逃れることができたのである。さらにプルタルコス『神託の崩壊について』の中の第22章によると、プラトン(Plato, v. Ch 427-347)が183の世界のことを語っている。これらの世界は三角形の形に従って並べられていた。その各々の面は60の世界を含み、そのへりに三つの余った世界がある。その三角形の内部の平面はそれぞれの世界が共有する炉とみなされて真理の野と呼ばれる。ここではかつて存在したものやまだ存在しているすべての物の根源、形態と原形象が動かずに横たわっていた。永遠がこれを取りかこみ、永遠から世界への流出口の如く時間が流れ出てゆくのであった。ゲーテは1821年にプルタルコスをすでに読んでいたが、『ファウストⅡ』の第1幕と第2幕の草案にはまだ母たちを登場させていなかったのである。(注4)

(3)

ファウストはヘレナとパリスを「騎士の間」で余興から皇帝の希望に応じてつれてくる約束をしてしまう。これの実行はファウスト単独では不可能であったからメフィストの黒い援助を頼まなければならない。そしてメフィストの魔力にすぎる。北方の中世キリスト教の世界に生息するメフィストにしてみれば、ヘレナとパリスのいる古代のギリシア世界は異教の地であり、出来ることならば回避したい場所であったから、ファウストの頼みを容易に受諾できないでいたが、不承不承その心のうちを明かすのであった。

実は高尚な秘密は打明けたくないんだが。寂しい所に女神たちは気高く座についている。その周囲には場所もなければ、さらには時間もない。

この女神について話すことは困惑してしまう。それが母たちなのです。

(6212~15行)

この箇所についてE. シュタイガーは言う。母たちは存在する、それなのにどこにもいない。これは原現象についてはあてはまらないが、原形については、あてはまる。(注5)(・印筆者)母たちはファウストにとっては不思議な名前であり、メフィストにとっても、その名を口にしたくないほどであることがわかる。女神の住む場所は通りようのない所で、願っても達せられたこともなく、達しようのない所(6224行)でもある。しかも開けるべき錠やかんぬきもなく、ただ寂しさに追いまわされる(6225行)ことをメフィストはファウストに話し、何とか心変りを期待するのであったが、ファウストは母たちの世界へ行く決心は変らないのである。母たちの国はとらえどころがない。永遠に空虚な遙かな境には何に一つ見えないのであった。「自分の踏む足音も聞こえないしすわろうにも固い物がない。」(6247行)宇宙空間的景観ではあるが形態学 of 原初的段階を連想させる描写である。メフィストは言う。

それでは降りて行きなさい。昇って行きなさい、とも言える。

(6275行)(・印筆者)

母たちの国が、地中に存在するのか、天上にあるのか杳として不明である。近代的悪魔のメフィストといえども、その国を熟知していないということ的印象づけ大地の根源にあることの神秘性を一層助長する言葉となっているのである。ファウストはメフィストから母たちのいる正しい場所を嗅ぎつける小さな鍵を受取る。

(4)

メフィストはファウストにむかって「すでに造られたものから逃れて解き放された形態の国へおいでなさい。」(6276行)と言う。母たちは自然の形態の国に住み独立した永遠の存在である。彼女たちの「底の底」なる国には時間も場所もなく虚無の世界だけが広がっている。自然の流れのうちで彼女たちが女神として崇められていたのは、その存在に特別の意義を持たせたゲーテの生産的精神のあらわれである。その超越的な存在は虚無の中にあるが、「過去に存在したものと、未来に存在するであろうものの、すべての魂と形態が彼女たちの住む場所の無限空間の中を、雲のようにあちこち漂い、母たちを取り囲んでいる。」のである。

(『ゲーテとの対話』1830年1月10日曜日)

彼女たちの世界には形を有する光や音の作用がなかった。ゲーテがエッカーマンに母たちの住む所を語っている。「今、かりに私たちの住む地球という巨大な天体の内部に一定の方向に何百マイルも進んで行っても形のあるものには何一つ突き当らずにすむほどの空洞があるとすれば、これが、ファウストの降りて行ったあの未知の女神たちの住む所であろう。彼女たちは、いわばあらゆる空間の外に生きている。というのは、彼女たちの身のまわりを、何一つ形あるものが囲んでいないからである。彼女たちはまた、あらゆる時間の外に生きている。というのも、昇ったり沈んだりして昼と夜の入れかわりを知らせる天体の輝きも彼女たちを照らさないからである。」

(1830年1月10日)

(5)

母たちはいくつかの集合体であり、集合体として限定された多元性の中

にしているのである。

座[○]っ[○]て[○]い[○]る[○]ものもあれば、立[○]っ[○]た[○]り歩[○]い[○]た[○]りして[○]い[○]るものもある、みなその時のつごうです。(6286行) (・印筆者)

この三種類の母たちの動作について考えてみたい。これらの動作は自然の領域にある根本的所作を意味し、人間の基本的動作の態様である。しかし「すわっている」ということはゲーテの自然科学研究上の視座からすれば、鉱物的なイメージを与えるものである。「立っている」ことは植物に共通することであり、「歩いている」ことは動物が神から与えられた行動であった。「座っているもの」が最初に出てくるのは明らかに自然の無機の世界の形成原理にならったことなのである。ゲーテの形態学では岩石のうちにも形態をつくろうとする意欲と権力が内在するのであった。(注6) 花崗岩の例があげられよう。地球生成の時にその中心が液体から固体の状態へ移行するさいの結晶化現象で、中心から最も表層に近い地殻として花崗岩が生じたのである。表層に最も近いということが最初に「座っているもの」が登場する理由だ。

「立っている」ことには、植物の成長原理に特有な傾向が秘められており、全植物界をきわだたせる垂直傾向である。「歩くこと」は動物の形成原理に固有の運動で特性でもある。個々の動物の関節の可能性のようにもとれようか。これら三種類の行動の形は生産の原理として「母たち」という名において定義されるものなのだ。つまりゲーテにとっては、形成する原理は同時にまた生産するものの原形でもあるからである。この三つの動作をE.シュタイガーは原形の観点から岩石、植物、動物に当て嵌めるのはゲーテには無縁の小さなごだわりだと言っている。(注7) (・印筆者) しかしこれは受容する側の問題意識の違いからきたことであろう。

(6)

永続する形態の局面下で形成される自然が母たちの中に嵌めこまれていた。このことは形態とそれを生み出すこと及び綱から種へのメタモルフォーゼを意味するのである。だから母たちは冥界の王のハデスではないし、パリスとヘレナはここでは初期ギリシア・ローマ時代の幻影としても出会うことはないのである。人造人間のホムンクルスは動物のモナドとして個体のあらゆる特徴を具有したが、母たちは精神的生命の中心体を与えられてはいなかったのである。

母たちの周囲に漂う被造物は活動するけれども生命はないは考えられている。

おん身たちの頭のまわりには、生命なくして動く生命の形態が漂っている (6430行)

この生命なくして動く生命の形態はゲーテの着想した *Entelechie* (エンテレヒー) に他ならないのである。エンテレヒーの単子が最高の段階で人間の魂となっているのであった。(注8)

H. ジーベックによると、最高の意味におけるエンテレヒーは活動性として、また破壊し難い生活力として大きな全体的なものに関連の中に現われる。それは「1個の永遠性」である。自然はエンテレヒーがなくては済まないが、エンテレヒーには強力なものと取るに足らないものがあるという。(注9) 生命のない形態に不滅とか再生とか永生という言葉を使うのは適切ではないであろうが、母たちの世界ではこれらはすべて連続しているメタモルフォーゼなのである。

かつて光と仮象の中に存在したもののあらゆるものが、そこで動いている。(6431行)

この詩句はゲーテがエッカーマンに語る次の箇所に符合しよう。「息だえたものが霊的被造物として母たちのもとに戻ってくる。そして再び新しい生

命が誕生する機会がくるまで彼女たちにそれは守られているのである。」(1830年1月10日) すべてのものが母たちのもとから再生を願っている。

(7)

母たちのまわりには形を造ったり形を変えたり、あらゆる被造物の形態が漂っている、(6289行) のであった。ここには原形の持つプロメテウスの流動性が表れていると E. シュタイガーは言っている。(注10) 「形を造ること」と「形を変えること」は母たちの永遠の遊びであり楽しみなのである。存在するものの原形として母たちは諸形態のメタモルフォーゼの根源をつかさどっているのであった。

母たちの世界はただ形成された自然という諸々の形態を保持しているが、プラトン (Plato, v. Ch. 427-347) におけるような、あらゆる存在しているもののイデーを持たないということである。美に対するイデーも母たちの国にはない。次にゲーテの形態の世界は動かない固定された存在の世界としてプラトンとは異質のもので生成の諸現象の世界と遊離したものではない。ゲーテの原形の着想はだからプラトンからではなくてリンネ (Linné, Carl von 1707-1778) に由来することが知られている。しかしゲーテはこの植物体系の創始者としてリンネに感謝の念を持ったが、この体系が自然にはたして即したものであるかどうかという疑問をいだいていたことも事実である。自然自体が個々の植物の形成において Art (種), Gattung (属), Klasse (綱) に従って生長しているかどうかという点であった。ゲーテの自然界の植物と動物の形態原理の着想が母たちの創造につながり、母たちの動作ふるまいに自然界を理解する手がかりが内在していた。『ファウスト』の中には母たちの他にも擬似的自然科学とでもいえる錬金術、黒魔術、呪術、妖術、占星術それにオカルトめいたもの等の中世の暗黒の部分が各所に見

られるが、それらは自然界の営みを知る手がかりを与えてくれるものとは言いがたく、ましては、自然科学とは遠く隔たっているのである。

(8)

最後に母たちのところにある Dreifuß (三本脚の香炉) について考えてみたい。

燃えている三本脚の香炉が見えてくれば、いちばん深いどん底まで達したのです。(6284行)

この三本脚の香炉はこの場でどのような意味を持つのであろうか。一つの見方に、これは予言の象徴で、メフィストがファウストに渡した鍵と同じくイメージの形成に役立たせる *dramatischer Behelf* (劇の一時しのぎ) にすぎないという説がある。(注11) 母たちの住いが「底の底」という最深の場であることから、何やら神秘的雰囲気を出している反面、稚拙で、あまりにも人工的すぎる添物にもなりかねないのである。

大胆にかつ積極的な仮説として、三本脚の香炉は心的行為の具体化したもので、自然の最も内奥にあるものとしての形態を意味するものである。

ゲーテの原岩石論を特徴的に表わしている「花崗岩について」という論文がある。「花崗岩は地球の内部の一番奥深いところにびくともせずに休まっているし、ときには地上に高く山岳となって聳え立ち、万物を包みこむ海の水もその頂には触れることができない。」(注12)(・印筆者)この一番深いところに花崗岩があることは取りもなおさず母たちの住いは花崗岩と重なるのであった。花崗岩の生成の過程が神秘的で火から成ったものか水から成ったのか確かでなく、またその組成がじつに多様で単純で無限でさえある。その構成する鉱物が石英、長石、雲母の主要三物質に代表されているから、

大地の核心にある三本脚の香炉の容器の部分に該当するのが花崗岩であり、三本脚は石英、長石、雲母の組成物をあらかし均衡のとれた形姿となっているのである。三本脚の香炉はゲーテの原形のメタモルフォーゼの隠れた表象となっているのである。

香炉が灼熱していることはファウストの手の中の鍵の光が人間の高度な精神力に呼応した結果であるといえようか。母たちは、いわば無意識のうちに生命の形態を生み出しているもので、香炉の中でも形態が次の新たな生成発展を待つのである。香炉は生産する原理として諸々の形態に対する暗号のように母たちをうちから補強する効果があった。鍵で香炉にふれると、香炉が忠実な下僕のように従い、ひとたびこれをこの世へ運んでしまうと、あとはその所有者の思いのままとなり、希望することを実現させる働きがあった。しかしこれはファウストの悪しき道徳的世界秩序を象徴することといえるのである。

(9)

母たちは内面の世界を象徴し、ファウストをヘレナへの幻覚に駆り立てただけではなく戦慄を与えるほどファウストの魂をゆさぶるほどの女神であった。ゲーテがエッカーマンに語っている。「この地上の存在の発生、成長、破滅、再生という永遠のメタモルフォーゼが母たちの間断なく続く営みである。」(1830年1月10日)

ゲーテが追求してきた詩的に運命づけられた物活論の延長に連なっていたのが、母たちなのであった。母たちはゲーテの詩的創作にすぎないが、彼女たちにゲーテはこの世の生命現象の原形を投射させたといえるのである。「この地上で止むこともなく生殖によって、新しい生命を受けるすべてのものに女性的なるものが主に働いているように、あの創造する神々は、当

然女性的と思われるであろうし、母たちという神聖な名前がつけられるのも理由のないことではないでしょう。」(1830年1月10日)このように続けるのであった。ゲーテの自然科学研究の根本的な構築となったのが、原形思想であったから、母たちはゲーテにとってグレートヘンに次いで自然科学上の永遠なる女性の似姿ではないであろうか。



侍女たちに取り囲まれているヘレナ

(リーペンハウゼンの鉛筆画)

テキスト

Goethes Faust Kommentiert von Erich Trunz

(Christian Wegner Verlag, Hamburg 1963)

Goethes Werke Bd. III

(Christian Wegner Verlag, Hamburg 1967)

Johannes Bertram: Goethes Faust im Blickfeld des XX.

Jahrhunderts.

(Hamburger Kulturverlag G. m. b. H., Hamburg 1963)

Dorothea Lohmeyer: Faust und die Welt

Der zweite Teil der Dichtung; Eine Anleitung zum Lesen des Textes.

(Verlag C. H. Beck, München 1975)

Wilhelm Emrich: Die Symbolik von Faust II

Sinn und Vorformen

(Athenäum Verlag Frankfurt am Main · Bonn 1964)

Emil Staiger: Goethe Bd. III 1814 - 1832

(Artemis Verlag Zürich und München 1979)

Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe

(F. A. Brockhaus · Wiesbaden 1959)

注

- (1) 柴田翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』(岩波書店)

1985年、P. 221参照。

- (2) 高橋義人『形態と象徴』ゲーテと「緑の自然科学」(岩波書店)

1988年、P. 168より引用。

- (3) 同上書 P. 174より引用。

- (4) Theodor Friedrich, Lothar J. Scheithauer: Kommentar zu
Goethes Faust (Philipp Reclam Jun. Stuttgart 1968)

S. 347-348. 引用。

母たちの典拠とプルタルコス『神託の崩壊について』を記述したものとしては E. シュタイガーの『ゲーテ』(1979年) 第3巻 S. 300~301と『モルフォロギア』第7号所収の高橋義人「ホムンクルス—錬金術から神話的自然讃歌へ」(1985年) P. 36-37があげられる。

(5) Emil Staiger: Goethe Bd. III (Artemis Verlag, 1979) S. 301引用。

(6) 高橋義人編訳・前田富士男訳 ゲーテ『自然と象徴』

(富山房、1982年) の P. 166参照。

(7) Emil Staiger は „Goethe“ Bd. III の S. 308参照。

(8) Herman Siebeck: Goethe als Denker (Fr. Frommanns Verlag, Stuttgart 1905) S. 150引用。

(9) ibd. S. 154引用。

(10) Emil Staiger: „Goethe“ Bd. III の S. 301引用。

(11) Erläuterungen zu Goethes Faust II . Teil (南江堂、1959年)
P. 43引用

(12) (6) の前掲書 P. 151引用。